

短夜



末政
百合絵

「貴方、煙草を吸いますか」

吸うと答えれば、今キセルをお持ちか、と聞いてくる。維新三傑といわれる目の前の男、大久保利通は愛煙家で知られている。キセル一本ではヤニがたまって使えなくなってしまうため、昼用と夜用二本のキセルを持ち歩いているらしい。家に帰ると子どもたちがせつせと掃除しているとの噂だ。

「いえ、勤務中なので」

真面目な勤務態度などといった試もないのだが、そう答える。

「そうですか。キセルなら私のものをお貸しします。これは指宿の煙草なのですが、どうですか？ 貴方も」

指宿煙草といえば、薩摩の指宿でとれる高級煙草だ。いただきますといえば、新しいキセルを取り出し、葉をつめてくれる。異様な光景だ。天下の大久保殿に一介の警察官が煙草をいただくなんて。それもご自身愛用のキセルで。これが平気でいられる自分は余程神経が図太くできているに違いないと内で嗤う。マッチも借り、火をつけ吸い込む。独特な香りが抜けていった。悪くない。

「貴方は無類の酒好きとお聞きした。酒でもてなす方が良かったのだろうか、まだこれから仕事があるので」

とはいうが内務卿と警官が酒を酌み交わしていれば、忍んでいても人の噂になる。

「何か、内密のお話だったのでは」

ここ数ヶ月、人につけられているような気配があった。殺気も感じられなかったし、今は特別隠すようなこともなかったゆえ、さほど気にしていなかったのだが、大久保の犬だったようだ。大久保は目を細め、紫煙を吐き出す。

「貴方に薩摩へ行っていたきたい」

「戦はしませんよ。大きな戦場は苦手だ」

薩摩と言えば今年に入り私学校が不穏な動きを見せており、二月になってからは西郷隆盛を頭に反乱が起きている。

「会津の戦での貴方の働きは有名だ。……齋藤一殿」

厳密に言えばそのころの俺は齋藤一ではなかったのだが、わざわざ訂正する必要はないだろう。御一新前は人を斬ったり、欺いたりしたのち、その時の名前を使い続けるのは都合が悪いとなると、すぐに名を変えていた。過去の名を名乗ることは過去の「罪」を告白すること同意義。齋藤一は新選組最盛期だった頃の名だ。今の政府の仲間を斬りまくっているので、お尋ね者になっていてもおかしくないのだが、それについての特別なお咎めはない。目を瞑ってくれるらしい。だが犬に探らせているくらいなのだから、会津での戦の時の名くらい先刻ご承知のはず。なのに俺を齋藤一と呼んだ。意図があつてのことだろうか。……齋藤一が得意とするのは肅清、間諜、暗殺。日陰の仕事だ。

「齋藤に用があるか？」

「……話が早くて助かります」

幾分か表情を緩めたあと、大久保はキセルで軽く灰吹きを叩いて火を落とし、真面目な調子に戻り、続ける。

「貴方には警視庁、警部補の藤田五郎ふじたごろうとして、警視庁第二番隊半隊長をお願いする。だが斎藤一は私のために働いてほしい」

「私に、今度は貴方の犬になれとおっしゃるんですね」

唇の端に笑みを浮かべてみせる。幕末時には幕府の、新選組内では局長と、副長の犬だった。何も特別なことはない。

「詳しく話をお聞きしましょう」

まあ、そうせかさないでいただきたい。そういうと大久保は立ち上がり、机の後ろにある窓の方へ歩み寄った。西日が差し込んできている。大久保は窓枠に手を掛け、どこか遠くを見つめた。

——その前に少し昔話を聞いていただきたい。御存知だろうが、私と西郷は同郷で薩摩の出身です。ふたつ年が上であるあの人は私の友であり、また兄のようでもありました。私も西郷も下級藩士の生まれで、身分が身分であったので苦勞も共にしてきました。私は今でこそ内務卿と言う大層な役をいただいておりますが、元々私自身はの上がってやろうなどとは思っていません。ただ西郷を世に出してやりたかっただけなのです。西郷は昔から人を惹きつける才のある男で、多くの者に慕われた。私もその一人でした。私に野望があったというならば、西郷を国の中心に担ぎ上げること、あ

の人の創る国を見ることだったのだと思います。

しかし皮肉なことに御一新からというものの、私たちはすれ違い始め、遂に道を違えてしまった。貴方も少しはご存知かと思われませんが、西郷は、身分もなくなり、帯刀もままならなくなった土族の不満を外に向けるべきだと言って、鎖国体制にある朝鮮に武力を持って開国を迫るよう征韓論を唱えました。西郷はまた武力で攻め入る前に自らが使者になって朝鮮へ行くとも言いました。朝鮮に行けば、西郷は最悪の場合殺される。自分が殺されれば、日本が朝鮮に攻め入るに足る理由になるだろうと西郷は考えていたのです。一度は決まりかけたのですが、海外視察に行っていた、私や木戸先生は帰国後、今は内政を整えるべきだと言って反対をし、その話は流れました。それからの西郷は見ていたたまたまなくなるほどに気落ちしてしまい、遂に薩摩に帰ると言い出した。

……先の戦いで死んでいった仲間のことを思うと、生き残ってしまった者は、少なからず罪悪感や喪失感にかられます。木戸先生もそれで大変やられておいでだ。私だって彼らのことを思い出さない日はない。ですが、西郷は多くの者に慕われ、その者たちを大変可愛がっていた。私の苦しみなど彼のものに比べれば小さなものと言えるのかもしれませんが。西郷は疲れていたのです。生への執着はもうひとかけらもみられませんでした。

薩摩に帰ろうとする西郷を私はとめました。必ず政府と、不平士族の間に戦が起こるからと。そうなれば西郷がその頭に担ぎ上げられるだろうことも容易に想像できました。そしてそうだったが最後、彼との道は永遠に交わることはないだろうとも分かっていました……。

その話を聞きながら、俺はあのふたりを思い出していた。近藤勇こんどういさみと土方歳三ひじかたとしぞう。田舎の寂れた道場主

と農民の子で新選組の局長と副長になった男たちだ。

俺は近藤を武士にするために、大小を差し、京に出てきたのだと、酒に酔った土方が言っていた。あの日は確か、花街で酒宴をしていた。酔うと昔切腹をした時の腹の傷を自慢し始める隊士がいて、そいつが襟元をはだけ始めたので、またかと思ひながら、用を足してくると言いおいて部屋を後にする。縁側の端に陣取り俺がひとり飲んでると、そこに土方が来たのだ。向こうから月を眺めながら歩いてきた土方は俺に気付くと、手に持っていた手紙をゆっくりと懐に収め、隣まできておいて、隣いかと聞いてきた。おそらく手紙はどこかの芸妓からもらった恋文だったのだろう。頷くと、役者のような顔に似合わず、荒々しく隣に胡坐をかき、月見酒とは風情があるなと言ってきたが、俺は月なんざ一切見ていなかった気がする。

土方は百姓出のくせして風流を愛する男だった。「愛して」はいたが、「解して」いたかは定かではない。豊玉という雅号で句を詠んではいたが、俺でも分かるくらい下手くそだった。

俺たちは何か一言、二言、ぼつぼつと語り、あとは黙って互いに酒を飲んでいたので、下戸の土方は猪口一杯かそこの酒で普段より饒舌になり、俺は近藤さんを真の武士にした……などと語り始めた。俺にしては珍しく酔っ払いの話を聞いてやっていたと思う。月が少しだけ眩しかった。

だが、戊辰戦争が始まり、劣勢になっていく戦況に近藤は疲弊し始め、流山での戦のとき、新政府軍に囲まれた新選組を逃がすため、自ら政府軍本営に出頭した。土方の、行けば殺される、やめてくれという必死な説得を振り切った。

大久保の顔を見つめながら思った。あんたもあの人も可哀想な人だ。誰かに望みをかけ、その人に

光をあてるために自らは影となるが、最後は影だけ取り残されるのだ。

大久保は、少しの間のあと、

「西郷を助けていただきたい」と、言った。

「あの人は反乱を起こした罪人だ。だが、あの人はこの国にとってまだ必要な人と私は信じています。貴方には疲弊した西郷にまだ国を背負わすのかと嗤われそうですね」

そうして一息ついて、ですが……と大久保は呟く。もう政府に戻ってきてくれなくてもいい。どうしても死なせたくな、と。

窓の方に顔を向けたままであつたので、表情は見えなかったが、たやすく想像できた。数年前に何度も見ただあの男の表情と同じだろう。

自分には珍しく心を動かされかけたが、大久保に呼びだされ部屋に入って来た時から感じていた何かがひっかかった。それが何か分からなかったのだが、振り返った大久保の顔を見た時に、ほぼ無意識に口が動いていた。

「難しいでしょう」

大久保が微かに表情を動かす。

「西郷殿は貴方に殺され、貴方は西郷殿に殺される」

そう俺が言うと、大久保の顔に困惑の色が浮かぶ。意味が分からないという様子が見て取れた。

「それは私と西郷が相討ちする、ということでしょうか。それなら無理だ。私は薩摩に行くことを止

められている。それに仮に行けたとしても、同郷の者に私は裏切り者だと思われる。西郷のもとに行く前に、殺されてしまうでしょう」

私は貴方とは違ってあまり腕には自信がないのです、と少し肩をすくめ自虐を含みおどけて見せてくる。

「私は政府軍の指揮官です。西郷がこの戦で死ぬれば私が殺したことになるでしょうから、そこは貴方の言う通りになるかもしれません……」

大久保が言うように彼が薩摩に行くことはおそらくないだろう。相討ちで死ぬ確率は極めて低い。だが、多くの者の死を見てきて、自分自身何度も修羅場を潜り抜けてきたためか、俺は死の匂いには敏感だった。なんとなく、人の顔や纏う空気を見て、こいつは今日この戦で死ぬなということなどが分かったのだ。実際その通りになった。近藤も土方も、沖田も……。沖田に至っては風邪だということで見舞ったときに、布団の上で、見舞いに来るのが遅いよ、もうよくなったと笑う幾分か血色のよい顔を見て、こいつは戦場では死ぬなと思った。誰よりも近藤を慕っていたから戦で役に立てず、病で死ぬことを憐れに思ったのを覚えている。西郷のことを思う今の大久保から発せられているものは酔いそうなほど濃厚な死の匂いだった。悲愁を纏った死の匂いにこちらの魂まで持っていかれそうだ。「いえ、今のことは忘れてください。お断りするのは心苦しいのですが、私には荷が重いように思います」

「貴方の他、適任者がいないのです。お気づきだったでしょうが、ここ数ヶ月勝手ながら貴方のことを調べてもらっていました。全て内密に行ってほしいのです。貴方なら西郷の元にたどり着けるで

しょうし、いざというときには剣の腕もたつ。そして情がないわけではないのに、情だけに動かされないところも好ましい。西郷を説得して欲しいのです。これ以上の戦は無意味だ」

そういうと大久保はわずかに目を伏せた。西郷は新政府に不満を持つ士族に担ぎ出されただけなのです。あれは優しい男ですから、これでみんなの不満がぶつけられるならと思っただけでしょう。御一新後、これまで多くの反乱があり、多くの人が亡くなってきました。今後日本でこれ以上の反乱が起き、犠牲が増えないように、また我々新政府がこれから政治をしていくにあたって動きやすくなるように、新政府には敵わないのだと世に示す機会になるならと思っただけに違いない。それから大久保は呟いた。

……私にその反乱軍の頭になれる器があればよかったです、と。

気をつけて聞いていないと聞こえない程の微かに、大久保はため息交じりにそう言った。そうすれば、西郷の代わりに大久保はなれたということなだろう。多くの者の思いを背負って、この先の国のために戦うというのだ。そんな大久保をどこまでも憐れな人だと思った。

恐らく大久保は今回の戦はこれからの日本のために必要な犠牲であるのだと思っている。だがその頭である西郷は国に必要な人間で、新政府を支える大黒柱としてこの先も政府に残しておきたかった。そして幼友達としても西郷を死なせたくなかった。大久保は昔、薩摩藩主の怒りをかかった西郷が死罪になるのは免れないといった状況で、西郷に自分も一緒に死ぬから、共に自害しようと言ったほどに西郷を特別に思っている。

西郷と共に行き、共に散ることも考えただろう。だが、それをしなかったのは西郷を支えるためだ

けに政府に入った大久保に他に背負うものができたからだ。それは他人になげることでもできないほどの重いものだった。

そう思えば、土方も京に上った頃は近藤を武士にすることだけを考えていて、倒幕も、佐幕も、言ってしまうえば、土方にとってはどうでもいいものだったように思う。だが、土方も近藤と共に死ぬことができたのに、最後まで戦った。ただ単に引っ込みがなくなっただけなのかもしれないが、簡単に投げ出せないものを背負ってしまったからなのかもしれない。国と新選組、大小にかなりの差があれど、やはり重なってみえてしまう。

「私は薩摩には帰れない。だから貴方に託したいのです。貴方の言う通り、望みは少ないことは分かっています。ですが、少しでも抗いたい。お願いできませんか」

俺の情だけに動かされないとこを買っているといいながら、情に訴えてこようとする矛盾。大久保は頭が切れる。だが今回は小細工なしに口説き落とすつもりらしい。それだけの思いが大久保にはあるのだろう。

今まで出来ないと分かっている仕事を受けたことはなかったし、多少の無茶なことでもいいやっのける妙な自信もあった。だが、今回ばかりはどう考えても難しいだろう。

「お受けしましょう。貴方の気休め程度のお役にしかたてないかと思えますが」

それでも受けようと思ったのは何故だろうか。あんまりにも憐れだったからか、それとも大久保の姿があの人と重なったからか。

「行ってくれますか」

「行きます」

そう言い切ると、大久保の纏う空気が幾分か柔らかくなる。十年くらい前まで敵対していた者の下で、その手先となって働くことになろうとは思ってもみなかった。警官になった時点で既に言えたことだが。

その後俺は「藤田五郎」として「内務卿」からの指令を受け、部屋を後にした。外はすっかり日が落ちてしまっている。

月の無い夜だった。

二章

明治十年五月十七日。東京を出立。二十一日に大分県下嵯峨ノ関に到着した。

それから間もない、五月二十六日、維新後体調を崩しがちだった木戸孝允が、遂に京都の木戸の別荘にて病死した。木戸は見舞いに來ていた大久保の手を取って、「西郷もいかげんにしないか」と言ったのち、亡くなったという。木戸と大久保は性格も真反対で顔を合わせれば論を戦わせ、よく対立していたが、互いに尊敬しあっていて、ふたりを夫婦のようだというものもいた。台湾出兵に反対

して、木戸が生まれ故郷の萩に帰ってしまったのを大久保自ら、木戸がいなくては困ると言い、迎えにいったこともあった。寡黙でそこにいるだけで周りを圧倒させる大久保に意見できるものは少なく、大久保と同郷の桐野利秋、幕末時は中村半次郎と名乗っており、「人斬り半次郎」と呼ばれていたあの男でさえも、大久保を前にすると何も言えなくなった。酔っていれば話せるだろうと、酒を飲んで意見をしにいても、顔を合わせると、意見ひとつでできなかったという。対等に論を交わすことができた貴重な人物を大久保はまた失ったのだ。彼の背負うものはまた一層重くなるのだろう。

二十五日に星師山での初戦を迎えたのち、戦が続いた。人を斬ることに愉悦を覚えるような酔狂ではないが、ある種の高揚を感じていたのは否定できない。

先の戦で、会津にて降伏した俺は会津藩士とともに斗南で謹慎をしていた。明治二年十一月四日に松平容保様の御長子容大様が陸奥国三万石を賜り斗南藩主となられたためである。新選組が旧会津藩主容保様にうけた恩は会津に残り、会津と共に戦うことで返したつもりだった。降伏した時はともとと会津藩士でない流れ者のような俺が、会津藩士として政府から罰をうけるのもおこがましいのではないかと腹を斬ることも考えた。だが会津藩士とともに捕縛された際に、薩長の奴らの中に仲間を殺されたとかで新選組をひどく恨み、この中に新選組の奴がいれば名乗り出る、叩ききつてやると喚く者がいたのだが、俺がと名乗る前に、ここには会津の者しかおりませんと旧藩士の山川浩殿に庇われたので、会津藩士として生きることしかできなくなってしまったのだ。

陸奥の方は飢饉が起ると餓死者が多く出ることが知られており、実際天保の飢饉のときには三千

もの人がなくなった。そんな作物の満足に育たない極寒の地で刀を振り回す事しか能のない男たちに何ができるというのだろう。会津から一万七千もの人間が斗南に向かったが、開拓は思う様に進まなかった。政府からの資金援助もあり、山川殿も奔走されたが、餓死者が山のように出た。脱走する者も多かった。山川殿が危惧していた一揆も起こった。犬猫まで喰らう生活をしていた者もいたという。これは「流罪極刑」だと新政府を非難する者もいたが、俺は器用な性質であったため、農作業をする傍ら、傘を張ったり、竹細工をしたりしてなんとか生活をしていた。

その後明治四年七月十四日、明治政府が断行した廢藩置県のおかげで、事実上の謹慎解除へととなり、容保様と容大様は東京へと向かわれ、旧会津藩士にも東京に出ていく者が増えてきた。

明治七年三月十四日、俺は斗南で世話になったところの養女を嫁に貰った。恐れ多くも松平容保様、旧会津藩士家老の佐川官兵衛殿、山川浩殿、倉沢平治右衛門殿に仲人をしていただいた。その年の七月に俺は東京へとゆき、警視庁に採用され、警察官としてそれなりに平穏な日々を送っていたのだ。久しぶりの戦で血が滾ってしまったのも致し方ないところである。

それにこの度の戦、相手が薩摩とあって戊辰での戦の恨みを晴らそう、仲間の仇を討とうと、旧会津藩士をはじめ旧幕府側の者が大勢いた。山川殿もまだ戦場ではお会いしてないが、出陣されていると聞いていた。俺の隊にも若い会津出身の者がおり、嫌でも会津戦争が思い出される。

初戦翌日、薩摩からの砲撃が激しかったため、俺は二番小隊から昨日の様子を見て腕がたつと判断した者を数名率い、薩摩に乗り込んだ。薩摩の連中は砲弾を容赦なくぶっ放してくる。手を焼かされたが懐に入り込んでしまえばこっちのものだった。多勢に無勢ではあったが、腕に覚えのある奴ばかり

りだったし、旧幕府側の者も多かったから薩摩者を真つ向から斬れる、と皆嬉々としてついでにきた。そんな空気に影響されてか久しぶりに大量の獲物を目の前に投げ渡されて、愛刀の撰州住池田鬼神丸国重は愉快がっているように感じた。

刀を振るえば、血が赤く糸を引く。眼前の男がうめき声をあげ、倒れていくのを視界の端でとらえながら、次の敵と向き合う。斬っては捨てる、斬っては捨てるを繰り返す。そのうちに敵は撤退していった。こちら側の被害はほとんどなく、圧勝。大砲二門をぶん取る事ができた。

後に上の奴らにお前は半隊長としての自覚があるのか、上の者が自ら敵陣に乗り込んでいくなど無謀にも程がある、と言われたが、無謀だったかどうかは結果を見ていただければ良く分かるのではないかと行ってやれば、それ以来俺のやり方に口を出さなくなった。その時俺に賛同した例の会津の若者はその後上に目をつけられていた。これだから会津者は馬鹿だというのだ。実直すぎる人間が多くて困る。だが大して気にした風もなく、そのあとともそいつは俺を、会津戦争の時に使っていた「山口二郎」の名で呼び、山口先生、山口先生と後をついてまわっていた。どうすれば貴方みたいに強くなれますかと聞いてくるから、真剣での戦いは相手の出方など考えず、ただ無心で斬るだけだと答えた。すると大真面目に納得したような顔をして、礼を言ってくるから、これだけで何が分かったんだと笑ってしまった。

昔から剣術を教えるのは苦手だった。感覚で身につけたものをどう言葉にすればいいのか分からなかったというのもあるが、由緒ある道場で、教え込まれ洗練された剣術などではなく、自分の剣術はただ貪欲なまでに強くなることを求めた邪道な剣であったからだ。一応無外流の型をとってはいる

が、どこの剣術のものかも分からない、人によっては顔をしかめるような技を使ったりもする。幼い頃から剣の才があったらしく無外流を習得するやいなや俺は、いろいろな道場に顔を出し剣術を学ぶようになった。道場破りのようなこともした。

俺の家は御家人株を買った足軽上がりだった。そんな家では次男坊など何の役にも立たない。どこかの婿養子にはいるか、兄の厄介となって部屋に住まわせてもらうしかない。俺には兄と姉がいたが、当然兄は親に大切にされるし、姉も氣立ての良い子だと可愛がられていた。俺は愛想がないと子だといわれあまり構ってもらった記憶がない。兄の廣明はあまり剣が得意ではなく、かわりに算術を得意としていた。のちに和算家として大成し、和算塾を開いていたが、明治七年には内務省へ用度課雇として出仕し、昇格などもあったらしい。俺が警視庁に採用されたのも兄が一枚かんでいるのではないかと思っている。

幼少期の俺は親に認められたいと思っていたのもあるだろうが、剣が苦手な兄を馬鹿にするために剣の腕を磨いていた。親からはさほど関心を得られなかったが、兄はそんな俺を、一はいい剣士になると褒めてくれた。筋金入りの捻くれ者だった俺はそれが面白くなって、だんだん家に寄り付かなくなった。

そんなときにふらっと入っていったのが、試衛館という道場だった。俺は生まれつき左利きだったが、武家社会では左利きは右利きに矯正される。俺は右利きに矯正されても強かったから、不都合もなかったのだが、ここで初めてそれでは勝てない相手に出会った。

初めて手合わせをした時はとっさに左手に持ち返して突いたため、相手が不意を打たれた形で勝て

たのだが、はじめて負けるかもしれないという恐怖を感じた。それと同時に高ぶっている自分に気づき驚いた。その剣士は沖田宗次郎といった。のちに沖田総司と名乗るようになる男だ。沖田は陸奥国白河藩士の子として生まれるが早くに親を亡くし、試衛館の内弟子になっていた。剣の腕は近藤や土方を超えていた。沖田は良く冗談を言ったり、近所の子どもと遊んだりする陽気な男であったが、稽古になると厳しく、恐れられていた。それに生まれながらにして天才的な剣の使い手で、また俺と同様、感覚で剣を振る男だったから、のちに新選組で撃剣師範に俺や沖田も選ばれたが、同じ師範でも俺らの中では永倉が一番上手く教えたような気がする。剣の腕を見極める目は皆持っていたと思うが、それを上手く言葉に表し、教授するところまで永倉は抜きん出していた。永倉新八は松前藩士で、剣術馬鹿をこじらせ脱藩した神道無念流の使い手である。試衛館でも、新選組でも、俺と、沖田と永倉が鏑を削っていた。

閑話休題。俺は試衛館と言うボロ道場に通うようになった。貧乏道場のくせに何人もの食客を抱えているもんだから、余計に貧乏になっていく。ひとりふたり食客が増えても変わらないと言われて、どうみても成り立たないだろうと呆れもしたが、釣った魚を携えて夕餉の時間にふらっと行つては、安い酒で盛り上がる連中と朝まで飲んだりもした。真面目な話も時にはしたのだと思うが、あいつらが馬鹿騒ぎをしていた記憶しかないから何とも言えない。俺が一番酒に強くて、日が昇るころには死屍累々と化している連中を年長者の井上さんとよく一緒に世話をしていたものだ。奴らは世話をされている分際で俺のことを散々「蟒蛇」と化け物扱いしてくれたから、足で蹴って仰向けにころがす。それからその辺にあつた徳利に水をいれてきて、奴らの口元まで運んで勢いよく流し込んでやるなど

甲斐甲斐しく介抱してやったこともあつた。そして恨み事を言いながらせき込む奴らを見無視して俺は日課の素振りをしにいくのだ。今思えばあれが俺の人生で一番平和な時だったのだろう。

俺が試衛館に通うようになってからしばらくして、旗本の子が俺に真剣試合を持ちかけてきた。立会人もいる正式な形で行われたのだが、俺はそこでそいつを斬り殺してしまった。試合を持ちかけてきたのは向こうである。だが、どんな理由であれ、目上の者を殺すことは重罪であり、死刑は免れなかった。母、姉には泣かれた。父には呆れられた。父に京に住む親類を頼るように言われ、背をむけられたのだが、その時に見た父の背中が微かに震えていたのを覚えている。

京に出た俺は「斎藤一」と名乗り、世話になっていく親戚の道場で剣を教え、あとはぶらぶらとして過ごしていた。そんな時、江戸から天朝様を守るためにやって来たという集団が、ひと悶着あつた末、壬生のあたりに居ついたと話を聞き、その話の中で出てきた言葉にひっかかるものがあり、またその集団が隊士を募集しているとのことだったので、覗いてみることにした。そこで彼らと再会したのだ。

明治十年五月二十七日は七里村、二十九日には竹田城で戦った。竹田城の役では二番小隊は、一番小隊の一部とともに、薩兵が立てこもる騎牟礼城を攻撃した。城を守っていたのは奇兵四番鎌田隊、隊長は鎌田雄一郎という男だったが、負傷しており、戦力から外れていた。この隊は三月に阿蘇で佐川官兵衛一等大警部が指揮する警視隊を破っており、佐川殿はそこで戦死された。そのため旧会津藩士たちの憎しみも前日の戦よりもさらに深く、激しい戦となった。佐川殿には会津の戦の後も世話になっていた。俺も刀を握る手にいつもより少し力が入っているような気がした。薩兵はそんな気に押されてか、退却していった。

明治十年七月十二日、森崎村を出発し、丸市尾で陸軍一小隊と共に二番小隊は兵を右半隊、左半隊に分け、右半隊は俺が率い本道を、左半隊を遊佐正人が率い間道を進んだ。右半隊は福原山より焼尾の薩壘を攻略し、高床山にいた薩軍を攻撃したのだが、苦戦を強いられていた。

俺は珍しく焦っていた。会津の戦で如来堂にて薩長の奴らに囲まれた時だってもっと冷静だった。ここ二カ月、機会を窺っていたが、西郷に近づく事さえできない。戦が始まった当初は勢いのあった薩軍だったが、結末はもう読めたも同然だった。西郷が戦死や自害をして果てるのだったって時間の問題だ。斬りながら肉塊になっていく男たちのことを思った。この者たちはどうして負けると分かっている戦に挑んだのか。「西郷」という偉大な存在を担ぎ上げれば勝てると思っていたのか。事実、一部

では西郷を神格化する者もいた。西郷は偉大である。だが、西郷とて人の子なのだ。人間には必ず「死」がある。西郷も死ぬのだ。この男たちはその西郷に命を預けている。大久保は前に西郷は征韓論を唱えるにあたって自らの犠牲も辞さないつもりのように言っていた。西郷はこの国のためなら喜んで命を差し出すのだろう。だが、西郷に命を預けている者たちは？ 西郷は自分についてくる者を道連れにすることをどう考えているのか。大久保のいうどこまでも「優しい」西郷はこのことをどううけとめているのか。「西郷」という「神」の前に命を差し出したものは、結果としてこの国の「生贄」となるのだ。考えるだけ無駄だ、おそらく自分には一生分り得ない、そう思いながら、国の肥やしとなる血を浴び、肉の確かな重みを刃を通して感じる。数多の「人命」という石垣の上につ城は果たして美しいのか。他国からの砲撃に耐えうる強固な城壁を築き得るのか。それを作り上げるためにはあとのくらの人身御供が必要なのか。そんな仕方のないことを思う。俺はただの警官だ。ただ国に従うのみの。それなのに滔々とそんなことを考えてしまうのは、やはり戊辰の戦のせいだろう。新選組の最後の戦だった。負けると分かっている戦。それでも俺たちは戦った。

慶応四年一月三日。鳥羽・伏見の戦いが始まった。新政府軍が五千、旧幕府軍が一万五千と兵数だけを見ると、旧幕府軍の方が優勢で、武器も旧幕府軍の方が最新型小銃を装備していた。だが、指揮戦略の不備により、我々は苦戦を強いられていた。そして翌日。四日、新政府軍に仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍とし、錦の御旗をかかげ出馬せよとの勅命が下った。奴らは官軍、俺たちは賊軍となったのだ。旧幕府軍に味方していた藩も次々と「天照皇太神」と金で刺繍された御旗を前にし、新政府

軍に寝返った。武士の世となり、ここ数百年。つい先頃までは徳川の天下で、天皇の存在など京に住む者しか顧みないと思われていたのが、なんとという変わり身の早さだと思うと同時に、突然得体のしないものを口の中に押し込まれ、その味がじわりじわりと広がっていくかのような一種の気持ち悪さは感じていた。

この戦で井上源三郎が死んだ。穏やかでいて、芯の通った人物で皆から慕われていた。近藤周斎に見込まれ、試衛館の四代目は近藤が継いだ。井上は近藤勇より先に入門していた。近藤の兄弟子にあたる、かなりの古株だ。俺でも物寂しく思ったのだから、近藤や、沖田などの寂しさは計り知れない。鬼の目にも涙が浮かんでいたのは見ないふりをした。

その後俺たちは大阪に向かった。兵力ではまだ旧幕府軍の方が多く、巻き返しを図っていたが、六日の夜、徳川慶喜は数人の重臣を率いて江戸に逃げ帰った。自軍を捨てて自らだけ逃げる将についていきたいと思う者などいるはずがない。戦意消失した者たちは離れ、俺たち新選組は慶喜公を追って、江戸に行くこととなった。

旗本を斬り、重罪人として京へのがれた俺が、今度は「朝敵」という更に重い罪を負って江戸に戻ってくることになろうとは思ってもみなかった。

江戸に帰った俺たちは近藤や土方たちの故郷へ立ち寄った。その者たちは皆喜んで迎えてくれた。あの一帯はまだ徳川最良の者が多かったのだろう。土方も久しぶりの故郷に普段の鬼の副長は鳴りを潜め、気を緩めていたように思う。皆はしゃいでいたが井上が共に帰れなかったことを寂しく思っているのがにじみ出ている。

俺たちはすぐにそこを後にした。積もる話もあったはずだ。俺は適当に入った宿屋で江戸の酒と久しぶりの再会を喜び、別れを惜しんでいただけであつたが、近藤には妻子があつたし、土方にも兄弟がいた。だが、長くとどまると心が揺れてしまう、それが怖かつたのだろう。

俺は実家には顔を出さなかつた。出せるはずもない。このようになったことを悔いても恥じていなかつたか、親と顔を合わせるには極まりが悪かつた。本当ならば旗本を斬つた時点でもう死んでいらずの身だ。この戦で死んだところで、その時期が少し遅くなつただけの話だ。あれから便りのひとつも送っていない。どこぞで野たれ死んだと思つているだろうし、それで構わなかつた。

その四日後甲州勝沼での戦で俺たちは完膚なきまでに叩きのめされた。ひどい戦だつた。思わず笑つてしまふようになるほどの負け戦だ。

近藤は疲れていた。仕方もない。この頃の近藤は腕を怪我して一生刀が振れないかもしれないという状態で、それに加えての負け戦続きだ。早く楽になりたい、死にたいと近藤は思つていたに違いない。その証拠に近藤からはむせ返るほどの死の匂いがしていた。息が詰まりそうで、近藤の側にいることが苦痛だつた。できることなら救つてやる。近藤にはそれなりの恩もあつた。だが、今まで死の匂いを感じ、気まぐれを起こして助けてやろうとしても、上手くいった試しが一度もなかつた。俺はあんたがそんなことでどうする、しっかりとしてくれとは言えなかつた。俺は刀を振り回す事しか能がない男だつたから、刀が持てない近藤に同情せずにはいられなかつたからかもしれない。

だが、土方は近藤の威厳を保つため陰に近藤を引っ張り込んで、大将がそんなことでどうすると

しきりに近藤の尻をたたいていた。

その後永倉と原田が近藤との意見の対立で組を離れ、俺たちは流山へ。そこで新政府軍に囲まれた俺たちを逃すために近藤は投降し、土方が助命嘆願に奔走するもむなしく、四月二十五日、板橋刑場で斬首された。首は京の三条河原にさらされた。

そして俺たちは会津へと流れついた。そのころの会津では、新選組を預かり支えてくださった会津藩主松平容保様が天皇には恭順する姿勢をとったが、新政府には反発を続けているといった状態だった。途中宇都宮城攻防戦で土方が負傷し、療養のため戦線から離脱している間、俺は新選組の隊長に任命された。慶応四年閏四月五日のことだった。その時の新選組はおよそ百三十名、副長には安富才輔、軍目付には島田魁、久米部正親が任命された。

俺は会津藩の命により、新しく体制を整えた新選組を率いて白河城に向かい、遊撃隊と共に守っていた。そこを攻めてきた連中とひと戦あり、初戦では勝つことができた。俺たちは白河口の総督に任命されていた西郷頼母に城だけを守るのではなく、その周辺にも兵を置くよう建白したが、聞き入れられなかった。大砲の性能の向上を戦場で肌身をもって感じた故の建言だったのだが、増援軍が来ると分かっていたので、不必要とみなされたのかもしれない。確かに二千五百人の増援が来た。だが俺たちが恐れていたように、大砲を打ち込まれ、手足が出せなくなり、結果我々はたった七百人という敵に負けた。退路も用意していなかったため、俺たちは散り散りに敗走することになってしまった。白河城の陥落は、痛手であり、それから何度も取り返すために兵を出したが、新政府軍にも増援もあ

り、俺たちは退却を繰り返すことしかできなかった。七月十五日、仙台藩から多くの増援がきて、七度目の白河攻撃を行った。しかし落とすことは出来ず、二ヵ月にもわたって攻めた白河城を諦めることになる。新政府は城だけにとどまらず、広く兵を配置していた。俺たちが敵わなかったのはこのためだった。建白が聞き入れられていたらと皆悔しがったが、そうは言っても何も変わらない。

その頃会津鶴ヶ城下で療養していた土方が伝習第一大隊の隊長として戦線復帰し、新選組と合流した。二十九日、二本松城が陥落する。その知らせを聞くと、土方は俺を呼び出した。近藤が投降し、斬首された後、新選組の幹部隊士は俺くらいしか残っていなかった。土方が戦線離脱をし、隊長を任命された時には俺のような裏の汚れ仕事ばかりしていた男が新選組の頭になるなんて世も末だと思っただけ、沖田は肺を患って病死していたし、永倉も新選組と袂を分かって靖兵隊を結成していたので仕方ない。そういう訳で土方が俺を呼び出し、意見を聞かせると言ってくるのは何も珍しいことではなかった。集団行動が得意な人間ではないから、組織の頭として采配を振るうのはどうも慣れなかったが、新選組では最も多く場数を踏んでいたし、勅には自信があった。土方も俺のそんなところを買っていたようだ。二本松城陥落の夜、俺が土方のもとを訪れると、土方は鎖を着たまま、大地図を広げ、腕を組んでいた。

斎藤か？ 地図から顔も上げずにそう言った土方に山口ですと答えたのを覚えている。土方は、そうだったな、てめえ名前をこころ変えすぎなんだよ、ややこしいと言ってきたが、俺が自分の意思で変えたのは一度きりです、あとは誰のせいでしょうと返した。土方や近藤の命で暗殺や隠密活動する度に俺は名を変えており、またその時だけの名前も使っていたからだ。俺が自らの意思で名を変

えたのは旗本を斬って江戸から逃げるとき、「山口一」から「齋藤一」に変えた、あの一度だけだった。土方は確かにな、と笑った。京で鬼の副長と呼ばれていた土方がのちに蝦夷に渡ったあと、母親のようだと言われたらしいが、思えばこの頃から丸くなっていたのかもしれない。近藤を担ぐ必要がなくなると本来の土方に戻り始めていたのだろう。

俺が地図の側に近づくと、少し横にずれ、俺に地図の正面を譲った。俺は土方と並んで地図を眺めた。戦況を確認した後、少しの間沈黙が訪れる。そして土方が口を開いた。俺は仙台に行こうと思う、榎本艦隊と合流する、その後北に向かうことになるだろうと。再び沈黙が訪れた。お前はどうか、と土方は言わなかったが、この空白の間はそういうことなのだろうと俺は思った。会津に残ります、そう答えると、土方は安心したような、また不安がっているような、矛盾も何もかもひとつの釜にぶち込んで煮たかのような表情を見せた。俺が会津に残れば、ここまで新選組を支えてくれた会津藩に新選組は忠誠を尽くすことができるという救われる気持ちと、会津のこの先を思っただけで悲嘆にくれる気持ち、幹部隊士がまた自分の傍を離れるという不安もあったのかもしれない。

弱くなったな、俺はそう思った。弱くなったというか、人間らしくなったという方があっているのかもしれない。「死」も「鬼」の前では恐れて逃げていっていたが、「人間」にはその白い腕を伸ばす。土方は、会津は負ける、それでもここで戦うかと聞いてきた。静かな声だった。幼子に問いかけるような声だった。だが、俺は全身の力を拳に込めて殴られたかのような衝撃を受けた。会津は負ける、もうだめだと嘆く兵はたくさん見てきたが、それは何も思わなかったのだ。だったらなんだと鼻で嗤っていた。しかし、土方の言葉に俺は揺れた。俺は何故負けると分かっている戦で戦いを続けるの

かと。その時初めて考えた。何故今まで考えなかったのかと自分自身に驚いた。会津公をはじめ、会津には借りがあつた。だが、忠義のためだけに戦う程、俺が義理堅い、出来た人間だとは思わない。俺は答えられなかった。

数日後、会津藩から母成峠へ行くよう要請された。土方は仙台に行くことを一度諦め、俺たちと母成峠へと向かった。八月十九日、俺たちは母成峠に到着したが、母成峠には大鳥圭介が率いる伝習第二大隊と仙台藩兵、二本松から撤退してきた兵が既にいた。そのうち大鳥の隊は二本松への攻撃を命じられて向かうが、大きな被害を受け、なんとか母成峠まで撤退してくる。これはこちらにとって大きな損害だった。

翌日、二十日、新政府軍が二本松から母成峠へ攻めて来たが、約三千人の大軍に対し、こちらは八百人程であった。俺たちは部隊を三つに分け、麓に近い萩岡付近を会津一個小隊、山頂付近は会津一個小隊と仙台二個小隊、母成峠の本道から東に行った山中の勝岩周辺に伝習第一、第二大隊と新選組が守った。新政府軍が到着し、戦いが始まったが、まもなく萩岡陣地の兵は敗走、敵軍の進軍を許し、伝習隊と新選組の出番となる。この隊は精鋭ぞろいで勝利の旗はこちら側になびいたかと思われた。がしかし新政府軍が山頂の会津、仙台藩兵に発砲をしかけると、両藩兵は恐れをなして尻尾を巻いて逃げ出した。奴らは伝習隊と新選組が未だ交戦しているのにもかかわらず逃げ出した拳句、追撃を防ぐため山頂付近に火を放った。俺たちの退路はこれによって断たれた。士気も下がり、戦えなくなった俺たちは、各々山中に逃げ込まざるを得なくなり、結果その日の夕方に、母成峠は陥落した。

次に新政府軍を迎えうつ拠点は猪苗代城いなわしろじょうであった。しかし母成峠の陥落を知った猪苗代の兵は戦わずして、城に火を放ち逃走した。会津藩は新政府軍の進軍が予想されるころすべてに兵を置いていたため、鶴ヶ城下には精鋭部隊をひとつもおいていないという状況だったのだが、その兵が鶴ヶ城に帰るまでの時間稼ぎにも役に立たなかった。その話を後に聞いたときには、怒りを通り越して呆れたものだ。

母成峠で負け、山中に逃げ込んだ俺は単身鶴ヶ城へと向かった。その日は雨だった。敵の搜索の目を掻い潜るには丁度良かったが、ひとり夜の山を敗走するのは惨め以外の何物でもない。土方に言われた言葉が何度も頭をよぎる。何で俺は戦っているのだろうか。思考は雨を吸った服と比例するように重くなってゆく。なのに俺の足はただ真つすぐに鶴ヶ城を目指す。そのまま逃げようと思えば逃げられたはずだ。逃げて名前を変え、田畑でも耕して生活しようと思えばできたはずだった。だがその時の俺に「逃げる」という選択肢はなかった。一瞬たりとも、脳裏をかすめることさえもなかった気がする。

二十二日の夜、新選組の兵は鶴ヶ城南東の天寧寺に集まり、俺たちはそこで一泊した。それが良くなかった。翌二十三日、新政府軍が鶴ヶ城下まで進軍してきたため、俺たちは入城することができなくなってしまったのだ。母成峠で負け、武器も何もかもが足りない状況で俺たちは戦うことができず、仕方なく米沢街道の塩川宿に移る。そこで大鳥と再会した。大鳥は俺と一緒に仙台に行かないかと誘ってきた。大鳥は母成峠から撤退する山中、土方と出会ったという。大鳥がもともと仙台に行くことを考えていたのか、そこで土方に持ちかけられ、仙台に行くことに決めたのかは分からない。俺

は土方に仙台行きの話をされた時と同じく、会津に残るといった。なんと言ったか定かではないが、今まさに落城しようとしている会津を見捨てるのは、真の義ではないとかなんとかそれらしいことを口にした気がする。

九月四日、会津藩から新選組に出陣命令が下る。鶴ヶ城北西にある神指城こうざしじょうの遺構に建つ如来堂へいくこととなったのだが会津に残った新選組隊士は十四人であった。あとは皆土方と大鳥について仙台へ行った。よく残った方だと思う。俺は、会津で恐らく死ぬことになるだろうがいいのか、などとは言わなかった。それを覚悟で会津に殉ずるつもりの方と、死に場所を求めている者しかいないと分かっていたからだ。

神指城の遺構につき、俺たちは二の丸南西の如来堂に宿陣した。二の丸東側の土塁から交代で偵察を行う。

越後街道を進軍する新政府軍が俺らの張る土塁の傍を通ろうとしたとき、丁度俺は奥に引っ込んでいた。でなければこちらから何の作戦もなしに仕掛けるなどということはさせなかった。たった十四人、会津に残った隊士を大死にさせるつもりは毛頭なかった。俺に一度命を救われたとかで、俺が会津に残るなら自分も俺の側で最後まで戦うというやつもいた。そんなやつらを簡単に死なせるわけにはいかない。土方が仙台に行ってしまう、俺は仮にも会津新選組の局長という立場になっていた。今までの俺なら部下のことをそう顧みなかっただろうが、少し変わっていた自覚はある。

奥で仮眠をとっていた俺は銃撃戦の音で目を覚ます。他の隊士も飛び起きた。街道を進んでくる新政府軍には土塁の陰に隠れている偵察中の隊士が見えないはずである。恐らく、隊士が自暴自棄で

もなり、一矢報いてやろうと発砲したに違いない。俺は刀を引っ掴むと、堂を出ようとする。そこへ隊士が数人駆け戻ってきた。街道を新政府軍が進軍してきた。山口先生の指示を仰ごうといったのに、誰それが発砲してしまった。今に新政府軍が土塁を乗り越えてここにやってくるでしょうと早口でまくしたてる。考える時間はなかった。叫び声、足音が近づいてきて、間もなく如来堂の外周は敵に囲まれた。あちらはこちらがたった十数名しかいないことに気付いていない。でなければこんな無駄な人員を割かず、とっとと街道を進んでいるに違いない。隊士の視線が集まる。さっと目を走らす。腹を括った者、死に怯える者に二分され、その者たちは皆俺に何かを期待してこつちを見ている。その中に清水卯吉しみずうきちという者がいた。齢は確か十六、十七、小姓をしていたが、鳥羽・伏見から続くこの戦でいつからか戦場にも出るようになっていた。清水は「私は山口先生について行きます。どうぞ私にお背中を守らせてください」と言った。俺が降伏するとは露ほども考えなかったのだろう。生意気な奴だと思った。俺が背を預けてもいいと思っただけでいい。今思えば沖田と、永倉には無意識のうちに預けていた気がするが、あの時の俺は今よりずっと偏屈者だったから、それに気づいていても知らぬふりをしていただろう。俺は清水に「好きにしろ」とだけ返した。それだけで満足したらしい。清水はこれから必死だと思われる戦いに挑むというのに顔をほころばせて見せた。数人の隊士が私も共にと口にする。馬鹿な奴らだ。思わず笑ってしまった。

俺は、愛刀を抜くと、死にたい奴は死ぬ、ここで死ぬのは犬死だと思ふ奴は俺について来い、血路を開くと言い放った。それにこたえるように皆が声をあげる。

堂を出ると新政府軍の奴らはこちらあまりの人員の少なさに驚いているようだった。それからの

ことは正直よく覚えていない。ただ鉄の匂いと、弧を描く血の赤色だけを記憶している。何人斬ったか分からない。無我夢中で刀を振った。何故俺は戦っているのかだけを考え続けながら。

この如来堂の戦で「山口次郎」は死んだ。

隊士のひとりが俺は討死したと言っただけ。あの状況だ、討死したと勘違いしても致し方なからう。だが「俺」は生き残った。本当に悪運の持ち主だと思ふ。今まで数え切れないほどの人を殺めた。なのに俺は必死確実という戦で生き残ったのだ。因果応報が聞いて呆れる。

他の隊士は皆散り散りになっていて、すぐに生死を知ることができなかったが、ずっと俺の背についてきた清水は生き残った。なんという名前に変えたか忘れたが変名し、死んだという話は聞いていないから、今もどこかで生きているはずである。

明治元年、九月二十二日、会津戦争は鶴ヶ城の開城と松平容保様の降伏をもって終結した。

結局俺は、何故戦い続けていたのか分からないまま、戦を終えた。

右肋みぎあばらのあたりが焼かれたように熱くなった。はっとして視線を落とすと、黒羅紗の制服が血で一層黒く染まっていくのが見える。銃弾がかすったようだ。無意識のうちに触ってしまった左手に血がべったりとついている。少々集中が足りなかったなと短く吐き出すように苦笑したあと、左手の血を制服で拭いて、刀を左手に持ち直した。右手で傷口を押さえながら刀を振る。敵は傷を押さえながら、左手で刀を持つ俺に驚いているようだった。左利きの武士など本来いないのだから、無理もない。このくらいは怪我で後れをとるような俺ではないが、だんだんと息が浅くなってくるのが分かる。額には脂汗が滲む。異変を感じ取ったのか、会津の若者が声をかけて来る。先ほどまで会津戦争のことを考えていたからか、思えばこいつ清水に似ているななどと考えていた。

「山口先生！ 怪我をされたのですか！」

怪我をしたと言ったところでどうしようもない。声が聞こえていないふりをして構わず斬っている、奴は近づいてきて、

「先生！ 怪我をされているじゃないですか！」

と言ってくる。

「大したことない」

そう返しても、そうですか、となるはずもなく、奴は、失礼致しますという、俺の右腕をとり、半ば引きずるようにして、戦場から連れ出した。陣に戻ると、すぐさま応急手当が始まった。奴は、俺がされるがままになっているのをしばらくの間見ていたが、いいですか、大人しくしててくださいいねと言いつつ、また戦場に戻って行った。

大したことはないと思っていたのだが、予想より傷は深かった。俺の他に俺の隊からふたりほど大きな怪我をしていて、一緒に黒澤の陸軍出張病院に運ばれて治療を受けた。その後、佐伯の陸軍出張病院へ移された。

傷病者がごろごろいて、狭く、部屋によっては腐敗臭が鼻をつく。だが、斗南で見たあの光景に比べれば幾分かましだった。

横になって、天井を見上げる。夜風が吹き込んでくる。日が沈むまで雨が降っていたからか、今夜は涼しい。ここ数日特にするともなく、寝て、起きてを繰り返していた。怪我が治ればすぐに戦に駆り出されるというのに、これでは身体が鈍ると思うのだが、思ったより傷はひどかったようで、身体が思う様に動かない。仕方がないから転がっているのだが、大人しくしていると考えてしまうのだ。何故、薩摩の連中は戦っているのか、俺は会津戦争で戦い続けたのか、と。それから珍しく昔の仲間のことを考えた。恐らく夢のせいだ。俺は毎晩とまではいわないが、幾度となく同じ夢を見ていた。浅葱色の羽織の後ろ姿が炎に包まれていくのを、俺がひとり見つめている夢だ。

あの羽織は芹沢が仕立てさせたもので、かなりの費用がかかった。その金を芹沢が払わず、いろいろと面倒なことになったのだが、洒落者が多かった新選組の連中は着ようとしなかった。結局使ったのはほんの数回だけだ。とはいえ夢に見るくらいなのだからよほど印象が強かったのだろう。

刃のように青白い三日月の他、空を飾るものは何もない。真つ暗な闇の中、炎は舌が這うようにゆっくりと地面に燃え広がっていく。忘れかけていた、だが確かに見覚えのある背中がいくつつか並

び、炎の向こうへ歩いていく。その背中を、俺は抜き身の刀を下げて見つめているのだ。俺は息を荒げていて、全身傷だらけで、背後からは刀と刀がぶつかりあう音と、銃声音、叫び声が聞こえる。足元には奴らが残っていた、折れた刃、血に汚れた羽織の切れ端、鉢金が散らばっていた。

やつらは死んでいった。だが俺はまだ、戦場にいる。まだ、俺は戦わなければならないのだ。自分の着ている羽織が鉛のように重くまとわりついてくるように感じた。奴らの背中が完全に炎の向こうに消えていき、その炎が空にまで達する。その炎が月を舐めると月は闇夜に溶けていき、代わりに無数の星が空に現れ始める。そのひとつひとつから発せられる光が俺の背にまた圧をかけるのだ。俺はそれを背負ったまま踵を返す。そして胸につかえて言葉にできない思いを吐き出すように声をあげ、敵に切りかかっていく。

そこで夢は終わる。

初めてその夢を見た日、目が覚め身体起こした後、何の気なしに頬に手をやった瞬間俺はぎょっとした。その指先が濡れていたからだ。己の手をただひたすら見つめ続けている俺を傍から誰かが見ているとしたら滑稽以外の何物でもなかっただろう。たったひとしずくの水滴に俺はひどく動揺した。俺が何の理由であろうと涙を流せる人間だとは思っていなかったからだ。以前の俺だったら、これを「弱さ」だと思っただろう。自分は腑抜けになったと思ったに違いない。だがそういう風には思えなかった。

怪我の状態は日に日に良くなっていた。近いうちに戦場にも戻れるだろう。戦場に戻れば、自由に

動けなくなるから、今のうちに「斎藤一」としての仕事を片付けておこうと思った。そして大久保のことを思った。俺は絶対に西郷を説得することはできないと言いつつ切った。西郷はこの戦で死ぬとも。それでも行ってくれと言った大久保も負けると分かっている、言ってしまうは無意味な戦を仕掛けているのだなと考え苦い笑いがこぼれた。

怪我をしたときには、指先で挟んで少し力を加えれば簡単に割れそうなほど細かった月は満ち、そしてまた欠け始めていた。下弦の月の日、西郷のもとに行く。そう決め俺は目を閉じた。

四章

八月二日。傷も塞がり、戦は無理だが、動くには問題がないくらい回復した。今夜西郷のもとに行く。大小はおいていくことにした。西郷を害すつもりはないのだから、相手に必要以上の警戒心を抱かせないための俺なりの配慮である。それに俺の刀は刃こぼれがひどく使うのがためらわれた。予備の刀は俺の隊の者が管理している。持ってこいと言うと理由を問われ面倒なことになる事は目に見えていた。柔術の心得はある。なんとかなるだろう。いざとなれば、その辺にいる奴らから刀を拝借すればいい。

日が沈み始めた頃、陸軍出張病院を抜け出す。新しく運ばれてくる怪我人とその付き添い、食料等の物資が運ばれてくるので人の出入りが活発な時間帯で、それに紛れて外に出ようとした時だ。

「山口先生？」

と、声をかけられ、ひやりとする。今ここでその名で呼ぶ人間は、俺の隊にいた会津の若者だけだ。だが、声と気配が違うと思ひ、気づかぬふりをして通り過ぎるのが得策と思いつつ顔をあげる。

「山口先生ではないですか！」

「清水、か……？」

そういうと、その男は花がほころぶように笑顔をみせる。

「はい！ でも今は江川三吉ですよ。会津で降伏するときに御一緒に名を変えたでしょう？ ああそれなら先生も今は山口先生じゃなかったですね」

俺が名前にいつも数字をいれるから、自分も真似をしていたのだとか言っている清水の顔をまじまじと見てしまう。あれから十年近くたっている。無邪気なところは変わっていないが、背丈や顔つきから時の流れを感じさせられる。お前も来ていたのかと言うと、はい、山口先生は警官になられたときいておりましたので、この戦にも来られるだろうと思ひまして、何かお役に立てないかと、お会いできて良かったですと言ってくる。心底嬉しそうにしている清水を見て悪い気はしないが、まづい時に会ってしまったと思つた。大久保からの任務について話すことは出来ないが、今俺が何か事を起こそうとしているのは明白で、ついてくると言い出しかねない。

「ところで先生、お怪我をされたと噂でお聞きしました。居ても立っても居られず、隊を抜け、各地

の出張病院を巡ってお探ししていたのですが……お怪我はもうよろしいのですか？」

清水は俺を上から下まで眺め、軽く首を傾げている。敵陣に乗り込むのによろしくないだろうと思ひ、警官の制服は置いてきていた。俺の今の格好をみて違和を感じたのだろう。それから清水は俺が腰に刀を差していないのを見て訝しげに眉をひそめた。

「先生、どちらへ」

発せられた声は低い。

「お前には関係ない」

「ありますよ、先生を探してどれだけ病院を巡ったと思つているのですか」
勝手にお前がしたことだろう、俺は知らんと思つたが、あまり騒がれると困る。

「構っている時間はない。ついてくるなら勝手に置いて来い、嫌なら早く隊に戻れ」

ついて来るなら西郷の陣に入る前に置いて行けばいい。そう思ひながら歩き始めると、清水は、はい、どこまでも御供致しますと言つてついてくる。少なからず懐かしくなり、今までどうしていたのかも気になっていたから同行を許してしまったのだ

清水とは会津で降伏して謹慎先に行くまでは一緒にいた。その後についてぼつりぼつりと清水が話すのを聞いていたが、陣に近づくにつれ、神経をとがらせていく俺に気付いたのか、清水は口を噤み、ただ無言のまま夜道を行く。

西郷のところに行くまで、俺はどうやって西郷を説得しようかと考えていた。

殺すのは得意だが、人を生かすのは……。護衛等も何度かやった。だがそれは護衛対象の命を守

るためにその敵を殺せばいいだけの話だ。要するに俺は人の命を奪うことしかできないのだ。人の「死」の匂いに敏感な、人を殺す事しか能のない男。そんな男に何ができるといえるのか。大久保は何故俺に。

西郷の陣は想像以上に警備が厚かった。ねずみ一匹通さないという気概が見て取れた。強固な守りは西郷が彼らにとつてどのような存在なのかを十分に表している。なるほどこれを突破するだけでも大変な仕事だ。大久保が俺に頼んだのはこのためかもしれないと嗤ってしまった。

戊辰の戦で俺たちが負けたのは西郷のせいだと思っていた。恨んでいる訳ではない。ただ敵ながら西郷を認めていた。

天朝様が薩長に味方したというのは大きな痛手ではあったが、俺たちが無様な負けをみたのは言うてみれば大将の差であろう。鳥羽・伏見の間抜けな戦は今だからいえるがすべては大将が江戸に逃げ帰ったためだ。同じ負け戦でも容保様の元で戦った会津の戦とは大きな違いだった。会津公に対する忠義の有無を問われると大したことはないが、少なくともこの戦で死んでもいいと俺は思っていた。会津の者は勿論だろうが、恐らく周りの者も同じように思っていたと思う。会津の戦で負けたのは兵力と武器の不足で、容保様には非はない。むしろそのなかで俺たちはよく戦ったと思う。

新政府の名立たる将は掃いて捨てる程いて、そいつらは今大きな顔して政府の重要な席で踏ん反りかえっている。維新の功労者みたいに振る舞っているのを見ると片腹痛いと思ってしまうのだが、でも西郷は別格だ。西郷にはついていけると思わせる何かがある。実際に会ったことはないが、敵軍の

将として、新政府の頭としての話は耳に入ってきたし、下で戦う者、働く者を見ればその将の器くらい容易に計れる。その西郷に会うと思うと複雑な感情がわき上がってくる。

深く息を吸い、一瞬それを溜め、吐き出す。清水にはここで待つようにいい、警備の目を盗んで潜り込んだ。

息は空気に溶かすように。足音は土に染み込ませるように。

自分を「無」にするのは京にいた時に身に着けた。闇夜に紛れて暗殺するのに相手に刀を抜かせるようでは未熟である。武士としてどうなのかと非難されるだろうが、俺は馬鹿かと鼻で嗤っていた。目的は殺すことだ。御託はいい、さつさと殺ればいい。だから俺は気配を消して相手の背後につき手が気づくか気づかないかのうちに居合で一瞬のうちにしとめる。相手も死の恐怖に怯えることなく逝ける。これほど親切なことはないだろう。

西郷のもとまで行くのは容易かった。

西郷は俺が陣に入り込んで目の前に現れても、驚いた様子も見せない。ただその顔をほころばせ、よう来もしたと言った。相手を包み込むような空気、心の底から歓迎しているのが分かった。俺は面喰ってしまった。「西郷」とはもつと対面するだけで気後れし、圧倒されるような男かと思っていた。どちらかというと大久保と対面していた時の方が気を張っていたかもしれない。西郷は拍子抜けするほど、なんの変哲もないただの男のように俺には見えた。俺たちはこんな男のために戊辰で負け

たのかとさえ考えてしまった。

西郷は大久保が個人的に遣いを送ってくることも読んでいたのだろう、要件も聞かず、何かもてなしできればいいのだが、と眉を下げ心底残念そうにしている。こちらが丸腰だということは見ればわかるだろうが、それにしても却って呆れる程の落ち着きぶりである。そのまま和やかな団らんでも始めそうな様子で、気を少しでも緩めるとその空気に流されてしまいそうだ。それではまずい。私は藤田五郎と申す者、大久保内務卿の遣いで参りましたとこちらが空気を作ろうとしたが、目を細め、にこやかに頷くだけだ。

俺は、なるほどこういうところか、と思った。俺は初対面の相手に気を許せるほど器用な人間ではない。だが西郷の前に行っていると不思議と力が抜けて来る。こんな男がいるのかと少し恐怖に似たものが湧き上がってくるのと同時に、西郷を神格化する者が出て来るのも仕方がないと思ってしまった。西郷からは確かに「死」の匂いがしたが、それは土方から感じた孤独な匂いや、大久保から感じた悲愴な匂いとはまた違った。往々にして、死の匂いとは負の感情を抱かされるものだと思っていたのだが、西郷から香るのは「安らぎ」であった。

大久保の話では西郷は疲れていて生への執着もないとのことだった。確かに生への執着は見られない。が、俺はもつと重苦しい負の感情の塊を想像していたのだ。目の前の男は「死」でも何でもその懐に抱いて笑っていいような男にしか見えない。

「西郷殿、この戦いつまで続けるおつもりか。これ以上は無駄な戦だと内務卿はお考えだ。戦を辞めてください」

そう言うと。西郷は少し申し訳なさそうに眉をさげる。

「まだその時じゃなか。おはんらには申し訳ないが、もう暫くお付き合いくいやんせ。おいは自分の死に場所は分かっとうつもいす」

「だが、大久保卿はそれを望んではおられません。あの方はまだ、貴方に生きて、この国を背負ってほしいと思われている」

「おいがおらんでも、もうこの国は問題なか。あとは若いモンに任せればよか」

その言い方は、木戸は既に亡くなっており、そしてまた大久保ももう長くないことをわかっているかのような口ぶりだった。俺は食い下がる。

「大久保卿は西郷殿が政府に戻って来られなくても、生きていてほしいと言われていました。降伏してください」

そこまで言って、自分が必死になっていることに気付く。十年ほど前も、言ってしまうは今も、西郷は俺の敵である。にもかかわらず何故ここまで熱が入っているのだろう。大久保の苦悩の満ちた顔が脳裏にちらつく。大久保が俺に乗り移っているのではないかと思った。大久保は俺の情に動かされないところを買っているといっていたのに、今の俺は感情に揺さぶられて、その感情のままに動いている。西郷の崩れぬ穏やかな顔をみると、俺が一人芝居でもしている気になった。

「おいはもうしまいじや。運命は変わらん。おはんが一番よう知っとうはずだ」

西郷は笑った。悲しむでもない、諦めるでもない、どこまでも底抜けに明るい希望がみてとれたのは気のせいだろうか。そしてすべてを見透かされている気持ちになった。

「おいもう政府にいたところで、役にたたん。巨大なからつぼの怪物になるだけじゃ。じゃっどん薩摩に帰って来もした」

西郷は続ける。

「薩摩のモンはおいに望みを預けてくれた。おいにしかできんことなら、それに応えてやりたいと思うた。政府のモンは力を持つてくるとだんだんと地方の声に気付かんくなる。国を動かしていると仕方がないことではあります、そげなことでは本当によい国とは言えん。じゃっどんおいはその声を届けてやりたいと思うた」

俺には分からないと思つた。誰かのために自分の全てを擲^{なげ}つことができるものなのかと怖くなつた。神や仏でもないそんな風には思えぬだろう。そんな俺に西郷は笑いかけ、俺には分かるはずだと言つてきた。「齋藤殿」、そう言つて、西郷は続けた。

「おいの知つているおはんは、その生き方そのものだ」と。

俺は「藤田五郎」の名を名乗つたはずなのに西郷は「齋藤」と言つた。俺のことを知っているのかと驚く俺をよそに、西郷は、もう話は終わったとばかりに、さあと声をあげ、一蔵どんによく伝えてくれと言つた。一蔵が誰だか分からなかつたが、大久保のことなのだろう。戦をしかけていつたのに、負けるとかの前に、戦さえさせてもらえなかつたような氣になつた。が、不思議とこれでよかつたのだという氣になつた。大久保もただ、自分をおいて先に行くのかと、幼子のように西郷に文句をひとつ言いたただけなのかもしれない。西郷を見ていると何故かそう思つた。

俺は西郷に一度礼をして、背を向けた。

西郷の元を離れ、俺は陣の外に向かう。俺の生き方は西郷の言うようなものじゃない、そんなことを考えていると、人が待ち構えている氣配を感じる。俺が入り込んだことに気付いていた者がいたのかと、小さく舌打ちをした。

腕のたつ侍の氣だ。こちらは丸腰。刀を抜かれればまた怪我を作つて、病院の天井を眺める生活が続く。面倒だ。だが今のところ相手から殺氣は感じない。

「せご兄は動かなかつただろう？ あれでも医者薦めた減量法で随分軽くなつたんだぜ」
はつと笑う声がする。木の陰から音もなくひとりの男が現れる。

桐野利秋。新政府では陸軍少将となつていた。会津戦争にも参加していて、会津若松開城のときは城の受け取り役として来たので顔は知つていた。桐野は明け渡しの際に男泣きに泣き、会津藩士に親身になってくれた。容保様はそれに感謝し、のちに人を介して宝刀を送つたという。

桐野は、せご兄は下剤を飲み続けたんだ、俺には無理だなと大げさに怯えるそぶりを見せてた。

「あれは動かせないな。俺には重すぎた」

「誰にも動かせないさ。天下の内務卿でも無理だ」

一息吐いたあと、少し遠い目をして桐野は続けた。

「何千、何万もの人間で持ち上げでもしなけりやな」

沈黙が訪れた。無数の星とその中に浮かぶ下弦の月。多くの星に囲まれ、月が微笑んでいる。

特に話すこともない。これ以上ここにいて見つかって殺されるのは正直馬鹿らしい。立ち去ろうかと思っただ、桐野が言葉を選んでいるのが分かり、少し待ってやることにした。

「……大久保さんはどうだ？」

「聞くまでもないだろう」

「だよな。だけど、そこは嘘でも元気だと言うところじゃないのか」

苦笑している桐野に、生憎俺はそんな気の回せる人間じゃないんでねと心の中で返す。桐野はまだいろいろと聞きたいことがあったのだろうか口を噤む。

「大久保さんがいれば日本は安泰だ」

そういうと、奴はひらりと手を振って、背を向ける。その背にぼつりと落とすように声をかける。

「ひとつ俺からもいいか」

桐野がゆっくり振り返る。俺が声をかけたが意外だったのか少し驚いたような表情をみせた。

「何故お前は戦うんだ」

桐野が質問の意図が分からないというように、少し眉を寄せる。

「何故お前たちは結果の分かっている戦を続けるのか」

直入に聞くと、無遠慮な奴だなと桐野は困ったように笑った。

「それはお前が一番分かっているんじゃないか？ 会津の戦でもお前は最後まで戦っていただろう」

「俺は……」

そうだ、俺は戦っていた。だが、俺は何故戦っているのか分からないまま戦っていたのだ。分から

ないからその理由を探すために戦っていたのかもしれない。

「俺は会津の戦のことを忘れた日は一日もない。最後まで抗い続けた会津藩の者たちこそが本物の侍だと思っただ」

「それに懂れて戦っているのか」

「馬鹿野郎」

桐野ははっと声をあげ笑う。

「新政府に思うところはたくさんある。が、それはもう正直どうだっていい。大久保さんが間違えたことなんて一度もない。きつと今度だって大久保さんが正しいんだ。今はただ、せご兄についていると思うてる。いつもせご兄の側にいた大久保さんは大きくなりすぎて身動きがとれなくなっているから、代わりにせご兄を支えてやろうと思っただ」

本当はあの人が一番せご兄と一緒にきたかっただろうにというて、空を見上げる。それから何か参考になったかと聞いてくるから、全くと答えると、恥を忍んで言ってやったのにひどい奴だと言ってくる。

政治的信念、忠誠心……全く持ち合わせていないかと言われると、そうではないと思うが、それだけでは俺の過去を説明するには足りない気がする。

「お前と手合わせしてみたかった」

唐突に何を言い出すのだろうと思っただ。「人斬り半次郎」と呼ばれていた桐野だ、相手には不足がない。ここ数年、対等に斬り合える者はいなかったたので、興味をひかれはしたが、今日は生憎の丸腰

の上、一応隠密活動中だ。負け試合に自ら挑もうとするとは、という意を含んで、酔狂だなと返すと、そうじゃない、いちいち可愛くないやつだと言われた。余計な世話だ。

「お前の腕前が気になるのは確かだが、勝った負けたとかどうでもいいんだ。剣にはその人となりが出る。純粹にお前がどういふ奴か興味があつた。それにお前がどういふことを考えて剣を振るうのを見たかつたんだ」

俺がどういふ人間か分かれれば、俺の長年の疑問も解決するのだろうか。そんなことを考えた。だが、こいつは恐らく俺の剣から感じ取つたことを素直に教えてくれることはないだろう。そんな俺の心中を知つてか知らでか、桐野は穏やかに笑っている。西郷といい、桐野といい、どうなっているのだろう。

死を覚悟している者の余裕だろうか。桐野は悟りを得たかのような、穏やかな空気を纏っている。会津の城の明け渡しの時はもつと人間味があつた。

「変わったな」

「お前は変わらないな、今のお前は目が人斬りのままだ」

少し間があく。家庭を持ち、むやみやたらに人を斬らなくなつた。俺も変わったと思うのだが、と思つたところで気づく。今の俺はあの頃の俺の続きなのだ。強制的に終わらせた、京にいた齋藤一と会津にいた山口二郎の。それは変わっているはずがない。この戦は先の戦の続きなのだ。

「そうかもな」

そう言うと、桐野は目を細めた。俺の無言の間も読んでいるかのようにみえた。

物騒な話をしているのに俺たちの間には似合わない妙に穏やかな空気が流れている。大した交流もなかつたのに、旧友にでもあつたかのようだ。恐らくこれは一方的に桐野が出しているだけで、こちらは居心地が悪い。だが、勿体ないと思つた。こいつが死ぬことが。言葉を交わしたのはこれが初めてだといふのに。

「刀を持って来ればよかつたな」

不意を突かれたように、桐野が目をしばたかせる。

「お前を他のやつに斬らせるのは勿体ないと思つてな。俺が斬りたかつた」

「悪趣味だな」

そういうながらも、桐野は嬉しそうだ。人好きする笑みを深くしている。その顔は西郷に少し似ているなと思つた。

雲が月を覆い隠す。側にあつた松明の火がちりりと音をあげる。人が近づいてくる気配がする。

桐野はそちらに目をやつたあと、

「時間切れだ。最後に話せてよかつた。気を付けて戻れよ」

と、まるで明日にはまた会えるかのような軽い調子で言つた。俺は無言で桐野の目を数秒見つめたあと、背を向けて繁みに身を隠した。その後、そこに誰かいるのかーという声に桐野が俺だと返し、ふたりが談笑しながら去つて行つたのを確認したのち、俺はその場を後にした。

桐野との会話を思い出す。桐野は西郷のために戦つていふと言つた。大久保の代わりに。会津の民は容保公への忠義のため、生まれ育つた故郷のために戦つた。きつと後者の理由は薩摩の士族にも言

えることだろう。俺には故郷というものが無い。俺が育った家は、所詮父が身分と共に金で買ったものだ。命をかけて守りたいと思える「場所」が俺には無いのだ。場所がなければ国の行く末を思つか。いや、それももう何度も考えて否定してきた。

では「忠義」のためか。会津公をはじめ忠誠を尽くすに値すると思える人もいる。だが、それだけではなのだ。それから西郷の言葉を思い出した。誰かのために自分の全てを擲つ、俺の人生はまさにそのものだ。買いかぶりだ。俺はそんな殊勝な人間じゃない。

待てを言いつけられた清水は刀を大事そうに抱え、木に背中を預けていた。何かあればすぐに刀を抜いて駆けつけるつもりだったのだろう。俺の顔を見ると安堵の色を浮かべたが、俺があまりにもさえない顔をしていたのか、すぐに顔を曇らせ、先生、どうされましたと聞いてくる。

「お前は、何故会津の戦で戦った。明らかに不利で死ぬかも分からない戦であったのに」

清水は意表をつかれたような顔をした。新選組にいる間は他の隊士に弱みをみせるようなことはしなかった。腑抜けたと呆れられたのだと思って、忘れてくれと言い、歩き始めると、いえ、違うのですと言いながら清水は小走りですついでくる。

「先生が私を頼ってくださいることなど一度もなかったので嬉しかったです。私だけではない、先生は誰にも御頼りにならなかった」

清水は俺を見上げながらそう言う。俺は少し極まりが悪くなって、視線をそらした。

「私はずっと小姓として新選組に追従しておりましたので、戦いと言えような戦に参加したのは会

津の戦が初めてでありました」

清水は視線を空にやり、記憶を思い起こすように遠い目をした。

「負け戦続きで皆不平不満をもらしておりましたが、山口先生は一度もそれを口にされなかった。先生が会津に残ると決められた時、私は正直不思議だったのです。会津の陥落は火を見るよりも明らかで、土方先生と仙台に行った方が、勝てる確率も生き残る確率も高い。それなのに何故、山口先生は会津に残ると決められたのかと」

清水の声は静かで澄んだ泉の水が滾々とわく様を思い起こさせた。その声に誘いざなわれるように、土方と袂を分かったあの夜が、色鮮やかによみがえってきた。あの日も下弦の月だったような気がする。そして無数の星が空を占めていた。そう思うと会津と薩摩は空の見え方が似ているような気さえしてくる。

「先生はあとで、口だけだなんておっしゃっていましたが、大鳥先生に言っただけで『今まさに落城しようとしている会津を見捨てるのは、真の義ではない』という言葉、私は先生の本心だと思っただけです」

それは違うと言いかけた俺に、かぶせるように清水は、先生はやはりご自身のことを良く分かっていらっしやらない、と言ってくる。

「先生はご自身のことになると、途端に雑になる。先生はいつか、自分は人を斬ることしか能のない男だと言われました。ですが、それは他人ひとのために抜かれる刀なのです」

何を言っているのだと思った。誰かのために自分の全てを擲つことができるのかと驚く俺に西郷が

言った「おいの知っているおはんは、その生き方そのものだ」という言葉を思い出す。

「私利私欲で戦う者もいる。ですが先生は違う。だから私たちは先生について行こうと思ったのです。志をもち、上様のためにと京を駆けた近藤先生のため、その近藤先生を支える土方先生のため、陥落を目前にした会津公や会津藩士のため、先生はいつも戦っておられた。今度の戦だってそうだ。先生は今も誰かのために戦っているのではないですか」

大久保の顔がちらつく。清水の足が止まる。

「先生が刀を捨てない生き方を選ばれたのも、死んでいた仲間の分の人生を背負って生きるため、そのように私には見えるのです」

それはどこかの壮大な物語のようだった。

それから数日後の十五日、完治した俺は戦場へと戻った。

五章

明治十年九月二十四日。西郷が自決した。城山での戦で腹と股を撃たれ、負傷した西郷は「晋どん、晋どん、もう、こちらでよか」と言い、別府晋介に介錯をさせ、果てたのだ。

西郷は城山での戦いが始まったのちに、新政府の事実上の総指揮官だった山縣有朋やまがたありともから自決を促す

勸告状を受け取っている。山縣は長州藩出身の中間あがりである。西郷がひどく可愛がっていた男で、山縣が不祥事を起こしても、西郷は山縣を最後まで庇ってやっていたらしい。当然山縣も西郷を慕っていた。山縣は西郷に、今回の戦は「壮士」たちを死なせ、自分ひとり生き残ることができないので、今拳兵するのは正しくないと知りながら、担ぎ上げられてしまったのであって、貴方の本心ではないと自分分かってはいる、無駄な血をこれ以上流さないようにしてもらいたい、私はこのことを強く望んでおり、私の苦しみを理解していただきたい、という内容を送ったという。それをどう西郷が読んだのかは分からない。大久保にしても山縣にしても己の感情とは別に、国を動かすものとして苦渋の決断を下さなければならなかったのだろう。

その後、別府晋介は戦死、村田新八むらたしんぱちは自刃した。

桐野は西郷が自刃したのを見届けた後、戦場に戻り、岩崎口の壘に籠って奮闘するがついに額を撃ち抜かれて死んだ。

西南戦争は終結した。

政府軍側にも西郷を慕う者は多く、城山総攻撃の前夜から陸軍軍楽隊が葬送曲を奏でていたのが今も耳の奥にこびりついて、離れない。

大久保は西郷の死の知らせを聞くと、号泣し、「おはんの死と共に、新しか日本が生まれる、強か日本……」と呟いたという。

その翌年、明治十一年五月十四日、大久保利通は暗殺された。西南戦争終結から一年にも満たず、西郷の後を追うことになった。下手人は西郷らが唱えた征韓論を支持していた不平士族六名で、大久保は今上天皇に謁見するため、馬車で向かっているところを襲撃された。全身に傷をうけ、首に刺さった刀は地面にまで達していたらしい。大久保が死ぬときに懐中していた二枚の西郷からの手紙は、大久保の血でどす黒く染められていた。

西南の役が終結した後も、大久保は薩摩に帰ることができなかった。大久保が西郷を殺した、そう言われ蛇蝎の如く怨まれていたためだ。墓を作ることも許されなかった。死んでもなお、故郷には戻れなかったのだ。

大久保は私腹を肥やしているとの噂もあったが、亡くなって蓋を開けてみれば、財産は借金だけで、大久保は私財を擲って国家支出にあてていたのだということが分かった。ますますどこまでも憐れな男だと思った。

大久保は暗殺される数日前、「西郷と崖の上で格闘し、一緒に崖下に落ちて、頭蓋骨が割れる夢を見た」と前島密に語っていた。それから、もしかすると、あの男の言っていたことは現実になるかもしれないと穏やかに笑ったらしい。前島があの男とは誰なのか、何を言われたのかと訊ねても、大久保は肩をすくめて見せるだけで、何も答えなかったという。

俺は十月四日に白杵から船に乗り、同月二十八日東京に帰った。そこで隊は解体し、俺はただの警察官藤田五郎に戻る。

俺は戊辰後、生き残った新選組のものと交流することはなかった。さして語りたいことがあるわけでもないし、これからは旧会津藩士として生きると降伏したときに決めたのもひとつの理由だった。そんな俺の性格を理解しているのか、永倉や島田等生き残った者も俺に便りをよこしてくることはほとんどなかったのだが、清水が俺の家に顔を出すようになり、あいつらが今何をやっているなどを報告して行った。島田は京都で道場を開いていて、その前は甘味屋もやっていたがうまくいかなかったようだ。死んでいった新選組の連中を弔うために毎日念仏を唱え、懐には土方の戒名を書いた布をいれているらしい。永倉とは交友が続いているという。如来堂の戦いで共に戦った久米部正親は今何をしているか分からないが西南戦争に参加していたらしい。永倉は今小樽にいるらしい等、そんな話を酒瓶片手に持ってくる。

西南後、各地で起きていた反乱もなくなり、国は落ち着いていた。戦っている時にはこれは必要な戦なのかと考えもしたが、今思えば領ける。逆賊扱いをされていた西郷もすっかり英雄扱いされている。いつの世も人間の心の移り変わりとは早いものだ。

大久保とは東京に帰ってきた後、一度だけ会った。大久保は変わっていた。ひどく落ち込んでいてと聞いていたのだが、もう吹っ切れたあとなのだろうか。大久保からは最初に嗅いだ悲愴なものとは違う香りが漂ってきた。それは西郷の傍で嗅いだものに近かった。

大久保は俺の顔を見ると、

「ご苦労様でした」

と、言った。それから、

「藤田殿のご活躍は聞いていますよ。大砲二門、単身で乗り込み奪い取ったとか」

と、続ける。噂に尾ひれはつきものだが、俺はそんな化け物ではない。単身ではありません、と正しておくと、それでも大差はないでしょうと、大久保は目を細めた。大久保のことをよく知っているわけではないが、以前より穏やかな表情をするようになったと思った。

「怪我をされたと新聞に載っていましたか、もうよろしいのですか」

そう言われて、もう大丈夫ですと答えたが、苦笑いがこぼれる。俺が傷を負ったことは、東京日日新聞に載り、うちに帰ってすぐに家内に肝を冷やしましたと非難された。あのくらの傷でいちいち騒ぎ立てる新聞に問題があるのだと言ったら、無言のまま睨まれてしまったのを思い出したからだ。

大久保はまたあのキセルに葉をつめ始める。俺もどうかと聞かれたが、遠慮しておいた。

そろそろ本題に入ろうと思ったのだが、どう切り出せばよいのかと逡巡する。報告も何も、もう大久保に西郷の死の知らせは届いている。謝るのも違うと思った。大久保だって結果は分かっている、恐らくただ西郷にひとこと言っておきたいがために自分を送ったのだろうから。謝ってもらいたいのはこちらの方である。

「西郷殿からの言伝です。一蔵どんによろしくとのことでした」

そういうと、大久保は困ったように笑った。その名で呼んでくれる人はもういなくなってしまうま

したね、と。それから、

「貴方を伝書鳩のように使ってしまったって申し訳ない」

というので、いえ、それは構いません、と言いながらが内心そのとおりで思っていた。もちろんそれも本心ではないが。

大久保が、貴方がこの前とは別人のように見えます、何かふっきれたような顔をされている、と言うから、どうでしょうかとはぐらかす。それを微笑ましそうに見てくるから居心地が悪い。西南に俺を送ったのは、俺のためでもあったのではないかと思えてきた。

「内務卿」と扉の外から声がかかる。大久保は扉に向かって「少し待っていてください」とだけ答え、俺に向き直ると、長くお引止めして申し訳ない、最後にひとつだけいいですか、と言った。

「貴方は以前『西郷は私に殺され、私は西郷に殺される』と言った。あれは今も変わりませんか」と。

だから、俺は事実であり、彼が望んでいるだろう言葉を返す。

「変わりません」

大久保は顔をほころばせ、ただ一言、「そうですか」と、頷いた。

縁側に胡坐をかいて庭を眺める。静かな夜だ。月がない夜だった。

こういう夜は無性にあの苦みが欲しくなる。キセルに火をつけ、深く吸い込み、吐き出すと変わらないあの独特な香りが抜けていった。

俺は、星が騒ぐ空の下、渦を巻いていた紫煙が夜に溶け込んでいくのを見つめ続けていた。

完

